

清月

11月中の出句 16名 延べ672句



第172号 平成26年11月

一七一年ぶりの陰暦閏九月「後の十三夜」について

ゆたか

当誌の昨年度十月号に二〇年に一度の季題「伊勢御神宮」について書きましたが、今回は、それより大幅にスパンの長い一七一年ぶり、次回は八五年後という事象の陰暦閏九月の十三夜について書きます。

新暦であれば、四年に一回の閏日二月二九日と時に閏1秒がありますが、陰暦は、一か月が二九日又は三〇日である事から、新暦に比べて年間一日ほど短くなっています。短くなった日数は、ほぼ三年に一回閏月を入れることよって補正されています。

近年の閏月は、一昨年の閏三月、その前の閏五月というように季節がずれないように異なる月に閏が割り振られています。今年は一七一年ぶりに閏九月があった年です。

陰暦九月には「十三夜」が有り、閏九月の「十三夜」は季題の呼び名の慣わしにより「後の十三夜」と呼ばれます。

今回の「後の十三夜」は、新暦一月五日で、全国的に月が見えたようです。各地の皆様より当清月デイリー句会に次の出句がありましたので紹介します。

うながされ羽織りて後の十三夜 宏一

海鳥は眠りて後の十三夜 幹夫

月光のたふとし後の十三夜 よし子

彩雲の漂ふ後の十三夜 恵山

残心を愛しみし後の十三夜 ゆたか

以上

目次

近詠	ゆたか	2
雑詠選	ゆたか	3
寸感	ゆたか	9
互選集計結果報告	事務局	10
互選一〇句の披講	幹夫 恵山 允孝 しゆじ	11
	宏一 省司 睦夫 よし子	12
	美琴 順一	13

近詠

野田ゆたか

宮小春源氏名らしき恋の絵馬
漆黒の闇なほ深め虎落笛
新海苔のぬばたまの艶炙りけり
一茶忌や人の世のもの愛ほしき
待人の手を上げて来る街小春

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

恙なく生きて勤勞感謝の日 千葉 清水恵山
挨拶はいつも山茶花垣根越し
御取越締めには謡へり恩徳讃
ご神座は整頓されて神の留守
お火焚や羽織るもの欲し京の街
職ひきて風の吹くまま枯尾花 岐阜 石崎そうびん
根尾谷の落日早し雪ばんば
炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ
野分あと比良も比叡も影の濃く
お絞りをぽんと叩きて牡丹鍋

身の丈の暮らし豊かに根深汁 千葉 田村公平
段ボール箱の電車に乗る小春
回天の基地なる湾を鷹渡る
八珍果自慢の甲斐に秋惜む
ようこそと菊のひらがな甲斐に入る
宮仕へ終へて啜れる十夜粥 岡山 橋本幹夫
駄駄捏ねる駄馬の前脚牧じまひ
ふる里の土の匂ひや大根引く
還暦も近き朝の初時雨
よく雨の降るひと日なり嵐雪忌
黄落や崩れゆくものみな愛し 吹田 池下よし子
一の橋渡りしよりの紅葉狩
思ひ出の黄色いハンカチ石露の花

まなびやの唱歌は遠し紅葉散る 吹田 池下よし子
六甲のパラボナアンテナ冬構
風なくてばさりばさりと朴落葉 大阪 木村宏一
皇帝と呼ばれし花や冬の庭
柿落葉個性豊に染まりをり
写真展秋競ひ合ふ額の中
得意顔見せて鴉鳥潜りけり
冬と云ふ季の移ろひの年重ね 三重 後藤允孝
冬濤の慟哭激し 日本海
鴨一羽湖面に暮色こぼしたる
海峡をむせぶ汽笛や冬の霧
朴落葉虚構の道の隠れ里
漬桶に塩の準備やけさの冬 鳥取 瀬尾睦夫

つかつかと脚の急ぐや暮早し 鳥取 瀬尾睦夫
荒星や博多は屋台多き街
くつくつと湯豆腐煮へる音ばかり
海に向け置かれし椅子や野水仙
大櫓や語れば辛き開拓史 静岡 渡邊春生
窯出しの猪口に新酒を注ぎけり
山粧ふ遍路ころがしてふ山も
軽やかに回転木馬天高し
菊枯るる戦車学校跡地かな
雨去りて色鮮やかに里紅葉 三重 山口美琴
街路樹の刈られて広き冬の空
落つるものすべて落として山眠る
七五三記念写真は早撮りで

大根引くビタミン豊富葉も食す 三重 山口美琴
稜線に落ち行く夕陽秋惜む 千葉 筒井省司
短日や男料理の水餃子
大根の畝果てしなき散策路
ジヨキングの娘に追ひ越さる爽やかに
冬空にクレーン高々富士を越え
明けまでは表示圏外冬安居 島根 白根鈴音
楔打つ山に重たき小夜しぐれ
雨かむり土をかむりて柿落葉
蹲踞の水輝けり石露の花
道行きの標となりて石露の花
紅葉風驚掴みして散らしけり 大阪 森戸しゆじ
護摩焚きや松の尾寺の深紅葉

黄落や写真ばかりに気を取られ 愛知 石川順一
広縁で猫と添ひ寝の日向ぼこ 愛知 駒田暉風

寸感

ゆたか

恙なく生きて勤労感謝の日 恵山

勤労を尊び生産を祝い互いに感謝しあう日。元は、農作物に感謝する新嘗祭の日。

「恙なく生きて」から、これまで大過なく過ごされた佳い生活ぶりが伺えます。

感謝の気持ちがよく伝わってくる。

職ひきて風の吹くまま枯尾花 そうびん

枯芒は、穂絮が飛び尽くして荒涼としてくるが、日に輝いている群落は壯観である。

自身の現況を枯尾花に重ねられている作者は、俳人ならではの所作でしょうか。

心の余裕が心地よい句に仕上がった。

身の丈の暮らし豊かに根深汁 公平

解熱発汗作用がある葱は、風邪の予防に良いと言われ熱い根深汁が好まれる。

ギャンブル的な不相应な生活を望まず、堅実な生活からの豊かさを感じられる作者。日々の幸せな暮らしが伝わってくる。

宮仕へ終へて啜れる十夜粥 幹夫

俳句では、浄土宗の十昼夜に及ぶ念仏法要で振る舞われる小豆粥を十夜粥という。

在職中は翌日のことなどもあって粥の時刻まで参籠出来なかつた作者。

現状を楽しんでいる句に仕上がった。

黄落や崩れゆくものみな愛し よし子

黄落は、銀杏・檜・樺などの黄葉が落ちることをいう。

紅葉に比べ派手さはないが深みゆく秋をしみじみと感じさせられる。

季の移ろいを惜しむ気持ちが詩的に伝わってきます。

風なくてばさりばさりと朴落葉 宏一

朴の三十センチ位の乾いた落葉が敷き詰められた上に落ちる大きな葉は音を伴う。

「ばさりばさり」から周辺の静寂と俳趣が伝わってきます。

擬音・擬態語が的を射ている。

互選一〇句の集計結果 互選者十人

高点句

五点 ふる里の土の匂ひや大根引く 橋本幹夫

五点 街路樹の刈られて広き冬の空 山口美琴

四点 鴨一羽湖面に暮色こぼしたる 後藤允孝

四点 思ひ出の黄色いハンカチ石露の花 池下よし子

四点 炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ 石崎そうびん

四点 窯出しの猪口に新酒を注ぎけり 渡邊春生

高点者

十三点 橋本幹夫

十一點 渡邊春生

九点 池下よし子

九点 山口美琴

互選一〇句 橋本幹夫選

冬構風が吹く度噂して 石川順一
腰かける石の温もり冬日和 瀬尾睦夫
護摩焚きや松の尾寺の深紅葉 森戸しゆじ
小春日の光る御浜のなぎさ石 後藤允孝
木の実落つあしたへ弾く山路かな 木村宏一
一葉づつ砂利の落葉を拾ふ今朝 筒井省司
お地蔵の肩を丸めし初時雨 清水恵山
かたりべの声に歳月身にぞ入む 池下よし子
落つるものすべて落として山眠る 山口美琴
時雨来て叩く潮目や海の色 田村公平

互選一〇句 清水恵山

てのひらに冬日頂きあふれけり 後藤允孝
御手洗の手にひんやりと冬立ちぬ 池下よし子
十重二十重紅葉の山へ幾曲り 瀬尾睦夫
裏庭の小さき黄落夕あかり そうびん
なほ燃ゆる冬の紅葉の瑞泉寺 橋本幹夫
白壁の歴史語るや蔦紅葉 木村宏一
人住まぬ生家は遠き花八つ手 田村公平
山茶花や写真を撮れば機影あり 石川順一
落つるものすべて落として山眠る 山口美琴
初冬や大地に鶯の影落し 春生

互選一〇句 木村宏一

護摩焚きや松の尾寺の深紅葉 森戸しゆじ
ふる里の土の匂ひや大根引く 橋本幹夫
思ひ出の黄色いハンカチ石路の花 池下よし子
街路樹の刈られて広き冬の空 山口美琴
お地蔵の肩を丸めし初時雨 清水恵山
冬隣り門扉の脇の灯油缶 筒井省司
人住まぬ生家は遠き花八つ手 田村公平
一両の電車の過ぐる冬野かな 瀬尾睦夫
鴨一羽湖面に暮色こぼしたる 後藤允孝
窯出しの猪口に新酒を注ぎけり 渡邊春生

互選一〇句 筒井省司

板の間に膝突き合わせ濁り酒 石崎そうびん
寄席太鼓ひびく境内文化の日 池下よしこ
冬空へ皇帝と呼ぶ花のあり 木村宏一
ふる里の土の匂ひや大根引く 橋本幹夫
落つるものすべて落として山眠る 山口美琴
一人居の待つ人もなき冬の暮 後藤允孝
一両の電車の過ぐる冬野かな 瀬尾睦夫
線路脇向かい合わせの干布団 田村公平
窯出しの猪口に新酒を注ぎけり 渡邊春生
思い出の黄色いハンカチ石路の花 池下よしこ

互選一〇句 後藤允孝

残り葉を惜むが如く冬の月 木村宏一
炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ 石崎そうびん
駄駄捏ねる駄馬の前脚牧じまひ 橋本幹夫
紅葉狩日向ひかけの濃き淡き 池下よし子
街路樹の刈られて広き冬の空 山口美琴
挨拶はいつも山茶花垣根越し 清水恵山
稜線に落ち行く夕陽秋惜しむ 筒井省司
流されて沖で目覚める浮寝鳥 田村公平
初冬や大地に鶯の影落とし 渡邊春生
腰かける石の温もり冬日和 瀬尾睦夫

互選一〇句 森戸しゆじ

風なくてばさりばさりと朴落葉 木村宏一
炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ 石崎そうびん
ふる里の土の匂ひや大根引く 橋本幹夫
思ひ出の黄色いハンカチ石路の花 池下よし子
街路樹の刈られて広き冬の空 山口美琴
短日や男料理の水餃子 筒井省司
身の丈の暮らし豊かに根深汁 田村公平
窯出しの猪口に新酒を注ぎけり 渡邊春生
鴨一羽湖面に暮色こぼしたる 後藤允孝
楔打つ山に重たき小夜しぐれ 白根鈴音

互選一〇句 瀬尾睦夫

炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ 石崎そうびん
ふる里の土の匂ひや大根引く 橋本幹夫
街路樹の刈られて広き冬の空 山口美琴
大根の畝果てしなき散策路 筒井省司
鴨一羽湖面に暮色こぼしたる 後藤允孝
母の忌や箆筒に眠る秋裕 池下よし子
錢別を賽銭箱に神の旅 清水恵山
風なくもばさりばさりと朴落葉 木村宏一
闇汁や神の意志さへ入れかねず 石川順一
楔打つ山に重たき小夜時雨 白根鈴音

互選一〇句 池下よし子

護摩焚きや松の尾寺の深紅葉 森戸しゆじ
広縁で猫と添い寝の日向ぼこ 駒田暉風
炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ 石崎そうびん
駄駄捏ねる駄馬の前脚牧じまひ 橋本幹夫
街路樹の刈られて広き冬の空 山口美琴
短日や男料理の水餃子 筒井省司
身の丈の暮し豊かに根深汁 田村公平
窯出しの猪口に新酒を注ぎけり 渡邊春生
漬桶に塩の準備やけさの冬 瀬尾睦夫
雨かむり土をかむりて柿落葉 白根鈴音

互選一〇句 山口美琴

皇帝と呼ばれし花や冬の花 木村宏一
木の実降る幻住庵への九十九折 石崎そうびん
ふる里の土の匂ひや大根引く 橋本幹夫
思ひ出の黄色いハンカチ石露の花 池下よし子
恙なく生きて勤労感謝の日 清水恵山
稜線に落ち行く夕陽秋惜しむ 筒井省司
人住まぬ生家は遠き花八つ手 田村公平
鴨一羽湖面に暮色こぼしたる 後藤充孝
腰かける石の温もり冬日和 瀬尾睦夫
木の実独楽廻るや山の風纏ひ 渡邊春生
互選一〇句 石川順一選
雨かむり土をかむりて柿落葉 鈴音
初時雨櫛通りの古き街 清水恵山
漬け桶に塩の準備やけさの冬 瀬尾睦夫
行く秋や岸辺に仰ぐ比良比叡 そうびん
唐崎の色変へぬ松天突けり そうびん
唐酢茎漬夕餉にまねる京ことば 木村宏一
リヤカーへ大根抜きて積上げる 清水恵山
蒟蒻を掘つて旭を浴びにけり 橋本幹夫
麦の唄唄ひて麦を蒔く日和 橋本幹夫
神の留守神主さんも旅に出る 山口美琴

インターネット俳句 清月
第172号
平成26年11月中の出句から

発行
平成26年12月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

